The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「災害と共生」を前にして ： 内発的であるとは何か
Author(s)	宮本, 匠
Citation	災害と共生. 2017, 1(1), p. 21-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67186
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「災害と共生」を前にして—内発的であるとは何か—

Before Thinking About "Living with Natural Disasters" - What is an endogenous process? -

宮本匠[1]
Takumi Miyamoto

要旨

本論文は、「内発的な復興とはいかに可能か」という問いをめぐって考察してきた筆者のこれまでの論考の概要とそれらの間の関係について、2004年新潟県中越地震の震源の村、木沢集落でのアクションリサーチのプロセスからふりかえるものである。復興を当事者と外部支援者のナラティブの協働構築として捉える視点、経験の社会的構成を「言語の水準」と「身体の水準」の2層から捉えることで内発的な復興における当事者自身がもつ他者性を強調する視点、内発的な復興には、よりよい状態を「めざす」かかわりよりも、当事者のかけがえのなさを承認する「すごす」かかわりが効果的であること、「めざす」かかわりは、近代的な時間の成立と関係していることなどが紹介される。最後に、今後展開したいものとして、復興曲線インタビュー、外部支援者の類型化、当事者による復興の評価、「スカブラの系譜学」を挙げる。

Abstract

This paper is a review consisting of the author's series of studies on an endogenous disaster recovery process based on action research conducted in Kizawa village affected by the 2004 Niigata Chuetsu earthquake. In these studies, several ideas are introduced. First, a recovery process can be considered as a collaborative construction of "narrative" by survivors and outside supporters. Second, an endogenous process can be analyzed as multi-layer, "level of language," "level of body", and "otherness" as located in survivors' "level of body" which is crucial. Third, the "sugosu" approach, which emphasizes irreplaceability of survivors, could be more effective than the "mezasu" approach which attempts to achieve betterment. The "mezasu" approach is inseparably bound to creation of a modernized sense of time. Finally, some research topics are mentioned as future topics of research.

キーワード: 内発性、災害復興、アクションリサーチ
Keywords: Endogenous Process, Disaster Revitalization, Action research

1. 個人的な体験

研究を駆動する原初的な問いや、原体験のようなものは、多かれ少なかれ、研究者なら誰しも持っているのではないかと思う。そして、その問いに答えを見いだすというよりも、その問いの在り方を見定めていくのが、研究という営みなのだと思う。「災害と共生」の発刊を前に、これからこのジャーナルを通して出会えるだろう新しい人々に向けた自己紹介を兼ねて、本稿では自分自身が「内発的な災害復興とはいかに可能か」という大きな問いを掲げながら考えてきたこと、そしてこれから考えたり実践したいと思っていることを書きたい[1]。その前に、私自身の研究を駆動する原初的な問いに関する個人的な体験からふりかえってみる。

それは、新潟県中越地震からの復興過程に関わる中での出来事だった。地震の震央の村である木沢集落に、大学生という肩書きと同時に、地震後に現地に設立された支援組織の人間として通っていた。木沢集落の人々はとても魅力的な人々だったが、当初は根強い行政依存と、地震によって一気に深刻化した過疎高齢化による諦め感と無力感があった。そして、木沢集落への復興支援は、（当初は）ことごとく不調に終わり、むしろ人々の依存心や諦め感、無力感をますます強めていくように見えた。

そんな木沢集落の雰囲気を変えていったのは、大学生との交流だった。畑を耕したり、一緒にお茶を飲んだり、山を歩いてみたり、お酒を飲みながら冗談を交わしたり。その過程の中で、いつのまにか集落の雰囲気が変わり、気がついた頃には、村の未来像について、村人が地に足の着いた言葉で語りはじめ、そのための方策が議論され、実行されるに至っていったのである。そして、この大学生の中で、現地に居住しながら、中心的に関わっていたのが私であった。

*1 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 講師・博士（人間科学）
Lecturer, Graduate School of Disaster Resilience and Governance, University of Hyogo, Ph.D. (Human Sciences)

支援者として、地域の未来を考えるための会議を開いても不調に終わる一方で、じっくりとお茶を飲みながら話を繰り返していく中で村人の表情が変化していくこと、そして、復興支援とは何のかかわりもないように思われる外部者のかかわりが、結果的に内発的な復興の取り組みにつながったということ。このことは、木沢集落以外の集落の復興支援にも関与していた私にとって、木沢集落にとどまらない問題であるように感じられた。そして、もしそうであるならば、これは災害復興の支援を考える際に、大変重要な視点ではないかと考えた。これが、「内発的な災害復興とはどのように可能か」という問いに出会う前提となった私の原体験である。

さらに、この問いを私にとっての原初的な問いとした、もう一段深い地層における体験があった。それは、村人とともに山を歩いたり、お茶を飲んだりしながら、村人の表情が変わっていくその最中に、私自身も何か解放されるような、清々しい時を過ごしていたということだ。自分が今生きているということの拠り所を充当されること。私は、村人以上に、そのかかわりの中で自分自身が生き生きと生きていることに気がついたのである。それでは、なぜあのとき、私は自分が生きていることの拠り所を充たされたと感じたのか、あの清々しい生き心地は何に由来したのか。「内発的な災害復興とはいかに可能か」という問いは、その深い部分で、自分自身の生き心地の在り方を問うことにつながっている。

2. 内発的であるということ

2.1 ナラティブの共同構築として

さて、木沢集落で起きたことをふりかえると、復興プロセスとは、何らかのすでに顕在化している問題を解決することを通してではなく、一見当該の課題とは疎遠に感じられる局面を通して変化していくという点で、非連続的なプロセスであるといえる。なぜなら、木沢集落の事例では、当初の復興支援は、かえって地域の人々の依存心、諦め感、無力感を強めるように働いてしまった一方で、復興支援とは何らか変わりのないような大学生との交流が、主体的な復興のきっかけとなったからである。後に「インストルメンタル」な時間感覚に基づく「めざす」かかわりとして、述べるように、実は現状をよりよい状態にしようとするかかわりは、逆に状況を閉塞させることがある。では、どうして大学生との交流のような、当該の問題解決には当たらないようなかかわりが、内発的な復興につながったのだろうか。この非連続的なプロセスが、天から降ってくるのではなくて、当事者である被災者によって生み出されることを説明するのが内発的な復興プロセスを説明することである。

私は最初に、大学生ら外部支援者がとっていたかかわりが、話を聞いたり、何かを習ったり、あるいは笑ったり、食べたりというように受容的であったことに着目した。外部支援者の受容的なかかわりが、当事者が語り出したり、教えたりというような、被災者が主語となるかかわりを生み、内発的な復興につながるのではと考えたのである。このことは、宮本・渥美（2009）の中で、ナラティブ・アプローチにおける「無知の姿勢」のような技法を例に出しながら、聞き手としての外部支援者を前に「復興の目標」に関する物語が構成されていく過程として論じた。しかし、この論考からは、内発的な復興プロセスを理論的に論じ尽くせた感はなかった。

2.2 「言語の水準」と「身体の水準」

この問いをさらに理論的に突き詰めて考えたのが宮本・渥美・矢守（2012）だった。ここでは、遠野物語拾遺に採録されたある説話についての大澤真幸の議論に依拠し、経験の社会的構成を「言語の水準／身体の水準」からなる複層的な構造とみて、木沢集落の復興プロセスを説明した（図1）。

	木沢集落住民の内的な世界	木沢集落という共同体
言語の水準	「水がない」(無数の欠如を帯びた陳情の対象としての木沢集落)	木沢集落住民
身体の水準	「生きる喜びの享受の対象としての木沢集落」	大学生

図1. 内発的な災害復興プロセス

「言語の水準」とはさしあたって言語化される水準であり、「身体の水準」とは、言語の水準に違背的な事態に遭遇したときに、回顧的に実は知っていたのだと言及される水準である。この２層が当事者の内的な世界と、それを写像するように当事者の属する共同体をめぐって存在するというのが、この図の説明するところである。

木沢集落住民の苦悩は、自分たちの幸せと分かちがたく存在する、生きる喜びの享受の対象そのものとしての木沢集落のあり方を、木沢集落住民の内的

な世界における身体の水準では知っていながら、言語の水準では、木沢集落を何らかの欠如を帯びたものとしてしか語れないところに生じていた。木沢集落住民の内的な世界における言語の水準と身体の水準のあり方は、それぞれ木沢集落という共同体をめぐって存在する人々のふるまいにも対応している。この共同体における言語の水準に対応するのは、木沢を欠如に満ちたものとして語る木沢集落住民自身であり、身体の水準に対応するのは、それを欠如に満ちたものとして語ることを自明とせず、むしろ豊かさにあふれたものとして捉えた大学生たちである。木沢集落住民の内的な世界における身体の水準に抑圧されていた「生きる喜びの享受の対象としての木沢集落」という見方を、木沢集落という共同体における身体の水準として木沢集落住民と対峙した大学生たちが、言語化させたのだ。木沢集落を何らかの欠如に満ちたものとして語る語り口をつくったのは、文化歴史的な事情、即ち、高度経済成長期を背景にしたこの地域発祥の陳情政治であり、自らの地域を何か欠けたものとして語れば語るほど村が豊かになるという成功体験の繰り返しであった（論文中では「Xがない」問題として整理している[2]）。

この図が説明するのは、しばしば強調されるように、災害復興を含めた地域における実践にとって、「よそ者が大切だ」と言われることへの返答である。たしかに、共同体にとっての他者である「よそ者」（図1では、木沢集落という共同体における身体の水準）は重要である。しかし、それ以上に重要なのは、当事者そのものの中に（身体の水準として）存在する〈よそ者〉（図1では、木沢集落住民の内的な世界における身体の水準）、であり、文字通りの「よそ者」はその〈よそ者〉が顕在化するための媒介なのだ。

復興における閉塞感を「Xがない」問題として整理したり、内発的なプロセスを2つの水準から動的に説明できたりしたことはひとつの成果だったが、しかしこれでは抽象的すぎて、まさに復興支援の現場で悩む人たちと共有することが難しいように思われた。そんな時に出会ったのが、保育の臨床コミュニケーションを実践、研究されている肥後功一さんの「めざす」かかわりと「すごす」かかわり（肥後, 2015）だった。

2.3 「めざす」かかわりと「すごす」かかわり

これは、何らかの問題を抱える子どもたちの来歴をふりかえってみると、何かが出来ない状態から出来る状態への移行の中でつまずきがあったこと、それは「出来るようになりたい」のになれなくて、それでも「出来る状態を目指す」ことを求められることに起因していることだった。よりよい状態を目指したくても目指せないときに、それでも「めざす」かかわりをとられると、子どもは一層無力感を強めてしまう。そんなときは、「よりよい状態をめざす」のではなく、むしろ「変わらなくてよい」ことを前提とした「すごす」かかわりが大切なのだと肥後（2015）は説く。この「すごす」かかわりが、当事者がよりよい状態を「めざす」ことにつながるというのだ。

「めざす」かかわりの落とし穴は、それが「よりよい状態をめざす」と標榜する以上、暗黙のうちに当事者の現在を否定しているという点にある。このとき、仮に当該の当事者がすでに自らについてのまなざしを否定的なものとして持っていた場合、「めざす」かかわりはその無力感を強めるように働いてしまい、事態を膠着させるのだ。このとき、「変わらなくてよい」ことを前提とした「すごす」かかわりが、当事者の現在の実存を肯定するかかわりとして成立する。この「めざす」かかわりと、「すごす」かかわりが、ここまで議論してきた中越地震における外部支援者の２つのかかわり、すなわち地域のよりよい未来を考えるような、あるいは「Xがない」の「X」を満たそうとするような復興支援によるかかわりと、ともに山を歩いたり、お茶を飲んだりするようなかかわりに対応するのは言うまでもない[3]。

2.4 インストルメンタルとコンサマトリー

「めざす」かかわりと「すごす」かかわりについて、もう少し理論的に考えてみると、そこでは両者が前提としている時間感覚に何らかの違いがあるのではということに気づく。特に、「めざす」かかわりが前提としているのは、よりよい状態へと常に変化していかなければならないのだという焦燥感さえ漂う時間感覚である。さらに、「すごす」かかわりは現在の肯定であるというが、それが何故に当事者の力づけに資するのか、しかもその「すごす」かかわりの中で具体的になされていることが、ともに山を歩いたり、お茶を飲んだりしていることだというのは、どういった事態なのだろうか。これは、「言語の水準」と「身体の水準」の議論にひきつけて考えれば、何が「言語の水準」の閉塞感を突破する「身体の水準」の顕在化に至るかは、あくまで蓋然的で予測不能としか言いようがないのだが、それでもそこでとられるかかわりに、何らかの共通点や傾向があるのなら、それを言語化することで、より実践的

に応用可能となるのではないかということになる。

そこで、宮本（2016b）では、真木（2003）の議論に依拠し、復興支援における時間論的態度の違いから、内発的な復興に至るために重要な外部支援者のかかわりとはどのようなものかを議論した。まずは、「未来が現在の意味である」というような、現在が未来にとっての手段となるような「インストルメンタル」な時間感覚というものが、ヘブライズムにおける終末論と、ヘレニズムにおける時間の「数量的」な把握の出会いによって成立する。すなわち、近代的な時間の成立である。そして、このインストルメンタルな時間が成立してもなお、現在の生の意味が未来へと外化されることなく現在のうちに充足することは可能だというのが真木の主張である。

この現在の意味が現在のうちに充足するような時間感覚はコンサマトリーな時間感覚と名づけられている。このコンサマトリーな時間感覚において、現在の生に意味を与える拠り所は、インストルメンタルな時間感覚が成立する際に抑圧した「あるがままの存在としての〈自然〉」と「かけがえのない存在としての〈他者〉」である。このインストルメンタルな時間感覚とコンサマトリーな時間感覚は、それぞれ「めざす」かかわりと「すごす」かかわりが準拠する時間感覚である。ここで、「すごす」かかわりが、一見ともに山を歩いたり、お茶を飲んだりしているのに過ぎないのに、どうして当事者たちの力づけに資するのかという問いに対する答えがわかる。それは、インストルメンタルな時間感覚（「めざす」かかわり、あるいは「X」を埋めようとするかかわり）において苦悩していた当事者が、コンサマトリーな時間（〈自然〉と〈他者〉との交わり）の回復によって現在の生の意味を充足されたと言えるのだ。

3. 内発的な災害復興のアクションリサーチの展開のために

内発的な復興とはいかに可能かについて、これまで考えてきたことを順に紹介してきた。未だ十分に考え尽くされたとは言えないが、大方の輪郭は見えてきたように思う。これからは、理論的には、今後は災害復興にとどまらない場面で生じている、その根っこでは結局のところ近代化の果てに行きつく問題として考えられるものと対応させながら、とりわけそれを乗りこえようとして悲劇に終わってきたもの（例えば、マルクス主義、第二次世界大戦、連合赤軍、オウム真理教による一連の事件）をどのように考えられるのかを通して、あらためて「インストルメンタル／コンサマトリー」の2軸における社会構想論について考えたいと思っている。

さらに、こうした理論的見地に立った実践を広げていきたい。そのひとつに私が考案したインタビュー手法である復興曲線インタビューがある（宮本, 2012）。これは、被災者に災害から現在にいたる心の変化や地域の雰囲気の変化について曲線を描きながら意味づけてもらうインタビュー手法である。図2は、中越地震から２年半後に描かれたものである。例えば、この曲線からは、曲線を押し上げる要素が、復興過程の中で、「仮設住宅:プライバシーの確保」、「村に戻る：生活再建」、「村おこしの誘い：地域の賑わい」、「地域復興交流会議：地域づくりへの自信」というように変化していくことが分かる。復興曲線は、復興過程を可視化することで、どのような要件が被災者の心や地域を支えるのかということについて示唆を得ることが出来る。例えば、阪神／淡路大震災のご遺族へのインタビューからは、被災地を一度離れることが心を整理する思わぬきっかけになっていることなどが分かった。

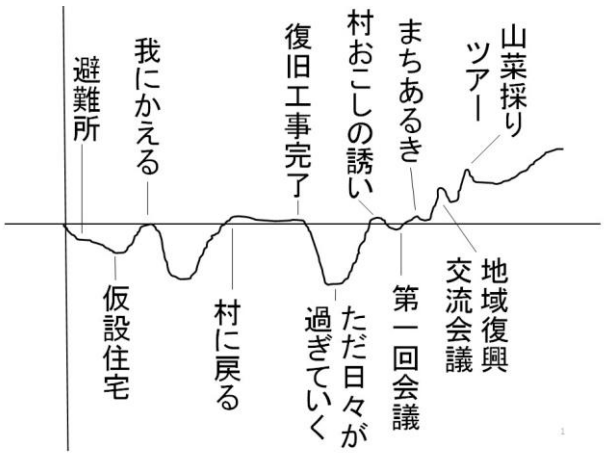

図2. 新潟県長岡市川口荒谷集落の男性が描いた復興曲線

復興曲線インタビューを続ければ、どのようなかかわり、要素が内発的な復興の端緒となるのかが、もっと明らかになるだろう。その中で、今後は、例えば宮本（2007）で考えた、復興プロセスにおける外部支援者の類型化（Visitor, Specialist, Opener, PartnerによるVSOPモデル）についても、そのダイナミズムについて考えたい。このモデルの実践事例を通した詳細な説明は、中越での私のパートナー（深い意味はない）阿部巧氏が、稲垣・阿部・金子・日野・石塚・小田切（2014）の中で書かれているので関心がある人は参照してもらいたい。宮本（2007）

では、類型化のための2軸を、未来に対する「ビジョンの共有の志向度」と、地域の人々との「共通体験の量」としていたのだが、これはそれぞれ「めざす」かかわりの志向度と「すごす」かかわりの志向度として整理しなおすことができると考えている。

一方で、内発的な復興を駆動する、当事者の側にある人々の類型について、とりわけユーモアでもって当事者・支援者双方のモードをくずしていく人々についての「スカブラの系譜学」とも呼べるものも考えたいと思っている。「スカブラ」とは、上野（1967）で紹介される筑豊の炭鉱の奥底で、死と隣り合わせの生活にありながら、仕事もせずすかっとぶらぶら過ごしながら（それゆえ、「スカブラ」と呼ばれたとの説がある）、坑夫に笑い話を聞かせていた人物を指している。木沢集落の事例をあらためてふりかえってみると、大学生たちのかかわりが一方的に木沢集落の閉塞感を解き放ったわけではない。その前に、木沢の豊かな生活に触れ、大学生たち自身も自分の生を支える豊かさの拠りどころを見つめ直していた。大学生たちだって、そして何を隠そう筆者自身だって、最初は木沢集落を過疎化の進む地域、被災して深刻な問題を抱える地域としてまなざしていた。そんな私や大学生たちを、まずは茶の間にあげて、お茶を飲ませながら木沢の暮らしをユーモアたっぷりに語ってくれた人がいた。山を案内しながら、過疎や地震の痕跡だけでない、木沢の暮らしを教えてくれる人がいた。そこに流れる豊かな時間を通して、大学生たち自身の木沢集落に対する見方を変化させ、そんな大学生たちの姿をみて木沢集落住民が自らの生や生活についての見方を変化させていく、そんな双方向の変化のきっかけとなった人達がいる。多かれ少なかれ辛いことの多い世の中を生きる私たちを、ユーモアをもって解きほぐすことで、その生き心地を豊かにしてくれるこのような人物たちは、よくよく考えてみると、アクションリサーチの現場にかかわる人々にとって、誰しも自分にとっては「あの人だ」と思い当たる節があるのではないだろうか。アクションリサーチの現場に結果的に欠かせないとも思われるこのような人物たちに私たちはなぜ引きつけられるのか、結局のところこの人物たちがアクションリサーチの現場を含め、私たちの世界において果たしている役割とは何なのかについて、上野英信の「スカブラ」に名前を借りて、系譜学的に綴っていきたいと考えている。

また、宮本・草郷（2014）で取り組んできた、被災者自らがその復興や暮らしについて、設問づくりから分析にまで関わって評価を行う地域生活改善プロセス評価手法についても、内発的な復興につながる十分な可能性を感じている。復興をどのように評価するのかという問題は、これまで関心を集めながらも、十分に議論されたり実践されたりしてこなかった。また、すでに行われているものも、復興に関わる行政の事業の評価であったり、研究者が設定した外的な指標（例えば人口増減のトレンド）によるものが多かった。地域生活改善プロセス評価手法は、自分たちの生活を基礎づける豊かさとは何かを考えることを通して、復興の評価を被災者自らが行い、その結果を再び自分たちの実践へと還元していくことをねらう手法である。こちらは、復興曲線インタビューというミクロな実践ともリンクさせながら継続したいと考えている。

自己紹介もかねて、自分自身の問題関心とこれまで考えてきたことを急ぎ足で書き連ねてきた。これら残された問いと実践の可能性について、「災害と共生」を通して出会えるだろう魅力的な方々と一緒にじっくりと取り組めることに胸を躍らせている。

補注

(1) 「内発的」という用語を採用している理由は、本稿の問題関心が、鶴見（1996）の内発的発展論を系譜の上にあるからである。鶴見和子が内発的発展論において考えようとした定住者と漂泊者の関係や、西洋化としての近代化・発展ではない多様な社会の成熟のあり方などについて、災害復興の場面から捉えたいと考え、「内発的」という言葉を用いている。

(2) 「Xがない」問題は、仮に「X1（＝農業用水）」が満たされたとしても、次々に「X2（＝子ども）がいない」、「X3（＝学校）がない」というように連鎖すること、この連鎖のうちに、誰がこのXを満たすのかという「主体」の問題と、そもそも本質的に満たされるべきXは何なのかという「認識」の問題を含んでいる。詳しくは、宮本（2016a）で述べている。

(3) 詳しくは、宮本（2015）で論じている。

参考文献

肥後功一(2015). 改訂版 通じ合うことの心理臨床—保育・教育のための臨床コミュニケーション論　同成社

稲垣文彦・阿部巧・金子知也・日野正基・石塚直樹・小田切徳美(2014). 震災復興が語る農山村再生　コモンズ

真木悠介(2003). 時間の比較社会学　岩波書店

宮本匠(2007). 現代社会における災害復興に関する現場研究　大阪大学大学院修士論文

宮本匠・渥美公秀(2009). 災害復興における物語と外部支援者の役割について：新潟県中越地震の事例から　実験社会心理学研究, 49, 17-31.

宮本匠(2012). 復興を可視化する—見えない復興を見えるように— 藤森立男・矢守克也（編）復興と支援の災害心理学　福村出版, pp.114-132.

宮本匠・渥美公秀・矢守克也(2012). 人間科学における研究者の役割—アクションリサーチにおける「巫女の視点」—　実験社会心理学研究, 52, 35-44.

宮本匠*・草郷孝好*（* 第一著者）(2014). 住民主体の災害復興に資する地域生活改善プロセス評価手法の有効性—新潟県長岡市川口木沢地区の事例—, 日本災害復興学会論文集, 6, 22-31.

宮本匠(2015). 災害復興における“めざす”かかわりと“すごす”かかわり—東日本大震災の復興曲線インタビューから—　質的心理学研究, 14, 6-18.

宮本匠(2016a). 第7章 減災学がめざすもの　矢守克也・宮本匠（編）現場でつくる減災学　新曜社, pp.163-186.

宮本匠(2016b). 現代社会のアクションリサーチにおける時間論的態度の問題　実験社会心理学研究, 56, 60-69.

鶴見和子(1996). 内発的発展論の展開　筑摩書房

上野英信(1967). 地の底の笑い話　岩波書店